

## 『花園天皇宸記』の助数詞

西田直敏

## 一

古代、中世の助数詞についての研究は、既に多くの精緻な研究が発表されている。たとえば、三保忠夫「古文書における助数詞(一)」「(『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学編) 第23巻第1号、第2号、一九八九年七月、十二月)、三保忠夫「奈良時代の寺院縁起資財帳における助数詞の考察——古代中国における助数詞に触れて——」(井上親雄・山内洋一郎編『継承と展開Ⅰ』古代語の構造と展開)和泉書院 一九九二年)、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(東京大学出版会 一九八六年)、山内洋一郎「中世における助数詞について——その一『実隆公記』に見る数量表現——」(『広島文教女子大学研究紀要』第5巻 一九七一年三月)、関口佳子「覚一本平家物語の助数詞」(西田直敏『平家物語の国語学的研究』和泉書院 一九九〇年 所収)など。

ここに、『花園天皇宸記』の助数詞をとりあげようとするのは、花園天皇(一二九七—一三四八 在位一二三〇—一二三八)の日記(一二三〇—一二三三)の自筆本が現存していて確実な史料であること、天皇在位中の十三歳から三十五歳までの長期間にわたり、事項、分量ともに豊富であること、読書家で和漢の書を読破し(日記に読書記録を残

している)、宮中の作法、典礼等に精通し、常に聖天子たらんと心がけた花園天皇が用いた助数詞は、鎌倉時代末期の助数詞用法の最も正当なものと見ることができからである。『花園天皇宸記』は、真名書きであって、いわゆる記録体・変体漢文の文章であるから、用いられている助数詞も漢語系のものが主であるが、和語の助数詞に漢字を宛てたものも用いられている。

本稿で問題にしたいのは、国語史的に、一四世紀初期の助数詞使用の確実な第一級史料として、『花園天皇宸記』をとりあげ、実証的にその事実を調査し報告するだけではなく、日記を通して、花園天皇の言語生活における助数詞使用の実態を見ることがある。

テキストには、『資料纂集 花園天皇宸記第一——第三』(統群書類従完成会 一九八二、八四、八六年)を用いる。

## 一一

助数詞の分類法については、峰岸明が提示した次のものが用いられている。<sup>注</sup> 先行論文との比較に便利なので、本稿でも、この方法によって分類する。

### (一) 量を測る単位

- (1) 人為的に特定の単位名を設定したもの(度量衡、暦日の単位など)
- (2) 容器・集団を単位名としたもの(俵、坏、壺、櫃、甕、筥、籠など)

### (二) 数を数える単位

- (1) 順序・頻度・種類などを単位名としたもの(回、度、巡など)
- (2) 性質・形状などを単位名としたもの

- ① 単一体を単位とする場合（基、脚、本、枚など）
- ② 集合体を単位とする場合（具、重、雙、領など）

注 峰岸 明『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会 一九八六年

以下、用例は、同一対象に対して一例のみ掲げる。また、その助数詞が、掲げた用例以外の対象にも用いられている場合を知るために、参考として、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』から「延喜式に見える助数詞」、「古記録における助数詞の用法」（貞信公記、九曆、御堂関白記、後二条師通記、水左記）、関口佳子「覚一本平家物語の助数詞」などによって相当する対象を示す。

見出語には、通し番号をつける。漢語助数詞にはよみをカタカナでつけ、和語助数詞にはよみをひらがなでつける。必要に応じて見出しの下の（ ）内に説明等を加える。用例の出所は「延慶三年十一月七日」を（延慶三・一・七）のように示す。（元徳元・一二別記）は「元徳元年十二月別記」である。

(一) 量を測る単位

- (1) 人為的に特定の単位名を設定したもの

。長さの単位

1 寸<sup>シ</sup>

初雪降、平地二寸許（延慶三・一・七）

蠟燭三寸為限（正中二・閏一・二〇）

陪膳卷御簾五六寸許（元亨三・一一・一七）

2 尺<sup>シヤ</sup>

熒惑与歳星相犯相去二尺四寸也 (正和二・一〇・七)

鹿(轆)轆破繩切纒一尺許所引也(元応二・七・二二)

未至御帳四五尺許居(文保元・六・二)

3 丈ヂヤウ

馬走出然而於二丈餘留了(元弘元・一〇・二三別記)

賢聖障子広一丈二尺(文保元・四・一九)

4 町チヤウ

三町牛走行(正和二・四・一六)

5 歩ホ

是孟子所謂五十歩奔与百歩奔也(元応元・閏七・二)

。時間の単位

6 日ニチ

此両三日多暑氣(元応元・七・八)

三ケ日(応長二・二・一)

今日院姫宮御百日云々(応長元・六・四)

7 月グワツ

懷妊経五ヶ月着帯(正和三・一・二〇)

8 年ネン

好学已七八年兩三年之間頗得道之大意(元応元・閏七・四)

- 9 碁<sup>キ</sup>（Ⅱ期）（満一年）  
後宇多院崩御之後不及一碁（正中二・一・一三）  
元（四六一七年、また四五六〇年、四五〇〇年など説あり）
- 10 廿一元三百廿年事……加一元以廿二元為一部（部）也（元亨四・二・四）  
夜<sup>ヨ</sup>
- 11 参内侍所三ヶ夜（正和二・二・二〇）  
今夜御産三夜也（延慶四・二・二五）  
点<sup>テン</sup>（一更。二時間の五分の一）
- 12 卯一点（正和二・三・九）  
剋<sup>クロ</sup>（Ⅱ刻。約二時間）
- 13 干時辰二剋（延慶四・二・二五）  
時<sup>トキ</sup>
- 14 女房二時取払候之（延慶四・一・二）  
歳<sup>サイ</sup>
- 15 先帝宮々十歳以上可遣城外（元弘二・四・一〇裏書）  
現神力満百千歳（元応元・七・一五）  
旬<sup>ジュン</sup>（十年）
- 16 齡及七旬官至八座一門之長者五代之帝師也（元亨元・六・二三）  
代<sup>ダイ</sup>

- 18 五代之帝師也(元亨元・六・二三)  
世<sup>セ</sup>
- 百世之智(元亨四・六・二五)
- 千世のくれ竹(正和二・五・三)
- 19 金錢の単位  
文<sup>チ</sup>
- 領金錢九十九文(文保三・四・二二)
- 20 位階の単位  
品<sup>チ</sup>
- 女房同詠之、三品以下也(延慶四・三・二二)
- 21 位<sup>チ</sup>
- 四位五位一列(文保三・一・一)
- 。行政などの区画の単位
- 22 村<sup>シ</sup>
- 和泉国三ヶ村事(元亨二・閏五・七)
- 23 郷<sup>ガ</sup>
- 先被付一郷之段如何之由(正中二・一二・五)
- 24 条<sup>ヂ</sup>
- 一条東洞院(元亨二・一・二六)

25 割合の単位  
分<sup>フ</sup>

四分蝕（応長二・六・一）  
「割」の例はない。

。容量の単位

石、斗、升、合、勺などの用例なし。

。重量の単位

斤、両、分などの用例なし。

『花園天皇宸記』（以下「宸記」と略称する）には、「米百石」（御堂関白記）、「綿千斤」（水左記）のような記述がない。

(2) 容器・集団を単位名としたもの  
26 盞<sup>サン</sup>（小さかずき）

今夜不飲一盞（文保三・一・）

27 盃<sup>ハイ</sup>・坏<sup>ハイ</sup>・杯<sup>ハイ</sup>

御飯二盃四坏事（正慶元・一一・二別記）

又雑談献一杯（元応元・七・九）

28 壺<sup>コ</sup>

一壺（元弘二・二・二〇）

29 樽<sup>ソン</sup>

賢助僧正、献一樽（元亨四・二・一二）

30 裏ウラ (包み)

有加布施、導師一重一裏、自余僧一裏也(元応二・九・三別記)  
「宸記」には、束、杓、櫃、篋、荷、袋などの用例はない。

(二) 数を数える単位

31 (1) 順序・頻度・種類などを単位名としたもの  
反サカ

万歳楽至両貫首二反歟 乱拍子及公卿納言已下二反(正慶元・一一・一二別記)  
以朝衡為使、内々三反御問答、所申太不可然(元弘二・一・一四)

32 返ヘ

念仏百廿返許云々(元亨四・一〇・一一)

33 巡ジユ

盃酌数巡(元応元・九・二七)

34 廻クワイ

両三廻之間(元亨三・九・一二)

35 匝サヲ (めぐる)

(御馬) 隆蔭朝臣乗之、三匝了下馬(文保三・一・一〇)

36 度ド

打鐘二度(元応元・七・一五)

一兩度給御酌(元亨二・一・一一)



37 都終日地震數十ケ度（正和六・一・五）  
献<sub>コト</sub>

38 供酒五献（元亨二・一・九）  
番<sub>バン</sub>

十五番了（歌合）（文保三・一・一五）

39 猿楽三番（文保三・一・一三）  
種<sub>シユ</sub>

陪膳取朕前菓子一種<sub>種</sub>（文保三・一・一）

舞童各捧十種供具進庭上（元応元・八・二四）

40 重<sub>ヘ</sub>

上ヲ二重ニ裹也（応長二・二・一八）

紫二重織物（元亨三・一・一七）

(2) 性質・形状などを単位名としたもの

助数詞としての特色が最もよくあらわれるものである。以下、対象となる事物等をへへに入れて用例の前に示す。また、「参考」として、先行研究で明かにされている「延喜式」（略称延）、「古記録」（「貞信公記」）「九曆」（「御堂関白記」）「後二条師通記」【「水左記」】（略称記）（以上、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』による）、「平安時代の寺院縁起資財帳・実録帳」（略称寺）（三保忠夫「古文書における助数詞（一）」による）、「覚一本平家物語」（略称平）【関口佳子「覚一本平家物語の助数詞」による】の用法（対象事物）を掲げる。

① 単一体を単位とする場合

41  
基\*

〔厨子〕棚厨子四基（元徳元・一二別記）

〔神輿〕神輿二基（文保三・一・一九）

〔参考〕延——仏、厨子、几帳、胡床、枕、棚、礼版、盤、磬、台、など。記——几帳、厨子、床子、灯台。寺

塔、灯台、高坏、門、鐘樓、高座、経台、礼盤床、唐椅子、厨子、幢、椅帳、金鼓など。平——塔

〔宸記〕の「神輿」についての例は、以前には見えないものである。

42  
脚

〔盤〕懸盤一脚（正慶元・一一・一二別記）

御台盤一脚（元徳元・一二別記）

〔机〕金銀平文机二脚（元徳元・一二別記）

〔椅子〕金銀小椅子一脚（元徳元・一二別記）

〔脇息〕御脇息一脚（元徳元・一二別記）

〔元子〕立元子 大臣三脚（文保元・六・一二）

〔床子〕長床子一脚（文保元・六・一二）

大床子一脚（正和二・一二・二六）

〔厨子〕置物厨子有二脚（文保元・四・二〇）

〔参考〕延——大椅子、床、床子、机、案、棚、榻、土火爐、牀、台、籠（輦籠、輿籠）、記——胡床、床子、机、

盤など。寺——盤、火爐、床、机。平——なし。

〔宸記〕に「蒔絵（一階）一脚（元徳元・一二別記）」とあるが、これは「蒔絵厨子」の「厨子」が略されたものである。

43  
合<sup>ガ</sup>

〈蓋〉硯蓋二合或三合（正慶元・一一・一二別記）

手筥蓋二合或三合（正慶元・一一・一二別記）

〈櫃〉礼服辛櫃二合（元弘二・二・二八）

〈篋〉御唐篋一合（元徳元・一二別記）

〈筥〉衣筥一合（元徳元・一二別記）

〈泥〉自仙洞給、勝光明院宝藏泥一合（正和二・二・七）

〈絵〉蓮華王院宝藏絵一合（正和二・五・三）

〈書籍〉小一条左大臣記一合（文保元・三・三〇）

本朝世記一合見了（元亨三・一〇・一七）

〈連句〉於親王方連句十合（正中元・二・九）

〔参考〕延——函、櫃、筥、盆、樽、槌、碗、壺、酒坏、蓋、瓶子など。記——櫃、筥、壺。寺——櫃、筥、火爐、

香爐、坏、瓶、合子、蓋、箱など。平——筥

44  
本<sup>ホ</sup> 「宸記」の〈泥〉〈絵〉〈書籍〉は箱に入っているものをいう。「連句十合」は他に見えない。「連句十番」と同意。

〈灯台〉高灯台二本 立灯台一本（正慶元・一一・一二別記）

〈台〉蠟燭台六七本（元亨四・二・六）

〈几帳〉几帳一本（元亨二・二・二七）

〈衝重〉衝重六本（元弘二・一・一五）

〈高坏〉高坏、大臣三本（正慶元・一一・一二別記）

〈樹木〉桜樹一本（正和三・一・一二）

松木三本（正和二・九・一二）

〈扇〉扇各一本也（元応二・六・一一）

〔参考〕延——灯台。記——灯台、台、高坏、柱、几帳。寺——高坏、錫杖、文挿、打花。平——卒塔婆  
 「宸記」の「扇」「樹木」は以前に見えないものである。

45 前ゼ

〈供花〉供花三十前（元応元・五・一二）

〈膳〉御膳二前（元応元・七・一五）

〔参考〕延——食床、机、案、棚、台盤、神、神座。記——机、僧膳、台、神宝。寺——机、床、脇息、闕伽器。  
 平——なし。

46 枚ヰ

〈茵〉唐錦茵一枚（元弘二・一・一五）

〈筵〉龍鬚筵一枚（元徳元・一二別記）

〈畳〉高麗畳二枚（元亨三・一一・二九）

〈円座〉円座一枚（正和二・一二・二五）

〈櫛〉御櫛四枚（元徳元・一二別記）

〈紙〉檀紙二枚（元徳元・一二別記）

清書三枚（延慶三・一二・一三）

〔障子〕障子二枚（文保元・四・二一）

〔参考〕延——玉串、人像、土偶人、木偶人、短冊、小刀、匕、鶏卵、土器、天井、頭巾、円座、扇、奏文、札、机、板、枕、柱、桁、桙、櫛、櫛、羽、茵、葉、蓋、釘、針、鏡など。記——円座、畳、盤、茵、紙、莛、紙など。

寺——茵、屏風、冠、蓋、盤、牒、畳など。平——文書、厚紙、綴しろう。

47 帖デラ

〔畳〕高麗端畳二帖（元応二・九・一別記）

〔屏風〕五尺屏風二帖（元徳元・一二別記）

〔紙〕檀紙一帖（文保元・四・一九）

〔書物〕韻鏡一帖（文保三・三・二）

〔参考〕延——屏風、木綿、昆布、紙屋紙など。記——屏風、紙、典籍など。寺——屏風、幕、白簾。平——書物。

48 畳デラ

〔畳〕紫端畳六畳（元徳元・一二別記）

49 字ウ

〔建物〕房舍十七字（正中二・六・二六）

張子屋一字（元亨元・七・一七）

飯屋一字（正和三・三・一七）

〔参考〕延——厩亭、倉、屋、幄、舍、殿など。記——幄、御殿堂、法華堂、僧房、屋など。寺——堂、殿、僧房、鐘樓、屋など。平——仏閣、僧房、民家。

50 社シヤ

- 59 騎<sup>キ</sup> 〈ものども〉公卿四五輩（元亨四・九・一三）
- 58 輩<sup>ハイ</sup> 〈人数〉一門輩七人、大名七人可上洛云々（元亨四・九・二九）
- 57 人<sup>ニ</sup> 〈段〉威儀師降階一級（元応二・九・一別記）
- 56 級<sup>キ</sup> 〈部屋〉寢殿西面并御車寄二ヶ間隔障子放之（文保三・一・一）
- 55 間<sup>マ</sup> 以鈴鹿置一層（文保元・四・二〇）
- 54 層<sup>ソ</sup> 〈段〉厨子第二層置比巴（文保元・四・二〇）
- 53 階<sup>カ</sup> 〈建物〉の階数 南庭方并二階方等御歴覽（元応二・四・一七）
- 52 寺<sup>ジ</sup> 〈寺院〉一寺可滅亡之由（正中二・一〇・一九）
- 51 宮<sup>グ</sup> 〈神社〉伊勢一社奉幣也（正和二・五・四）
- 50 宮<sup>グ</sup> 〈神社〉日吉社二宮御正躰（応長元・一二・一八）

60 〈乗馬の人〉 其勢五千騎（元亨四・一一・一六）  
口<sup>コウ</sup>

〈僧の数〉 番僧八口参上（文保三・三・二九）

〈器具〉 鈴一口（正応元・六・二六裏書）

御泔坏一口（元徳元・二・二別記）

〔参考〕 延——僧数、刀、器、坏、壺、蓋、盤、硯、瓶、筥、釜、鉢、鈴、鐘など。記——壺、瓶、僧など。寺——僧侶、器物、楽器、袋など。平——なし。

61 身<sup>シ</sup>

〈からだ〉 後宇多院一身出御（正中二・一二・一〇裏書）

院御方与朕一身也（文保三・二・一）

問云、大通智勝仏他受用身歟。变化身歟云々、答、可涉一身云々（元応一・三・一一）  
「宸記」の「身」は、天皇、院、仏身など聖なるものを数えるのに用いられている。

62 軀<sup>タミ</sup>

〈仏像〉 上皇千軀阿弥陀被供養（元応二・五・二七）

63 軀<sup>タミ</sup>

〈仏像〉 十一面観音一軀（正中元・一二・一三）

64 疋<sup>ヒキ</sup>

〈馬〉 朕馬一疋也（文保三・一・一四）

〈犬〉 犬一疋走来（正和六・一・一六）

〈馬牛・牛馬〉馬牛各一疋引出之……又予分牛馬各一疋賜之(正中二・三・九)

〔参考〕延——帛、服、紗、絹、綾、羅、錦、馬、駄など。記——絹、綾、馬、牛など。寺——木綿子、綵白絹。平——絹、馬。

〔宸記〕では、「絹何疋」のような例がない。

65 匹ヒキ

〈馬〉引馬十匹(正和元・一一・二九)

66 頭ト

〈牛〉院御方御牛一頭、朕馬一疋也(文保三・一・一四)

〔参考〕延——仮面、牛、猪、兎、豕、鹿。記——牛、鹿、羊。寺——面、冠、師子(簪)、高麗犬、平——なし。

「宸記」では、「牛」は「頭」、「馬」は「疋・匹」であるが、「牛馬」をいっしよに言う時は、「牛馬各一疋」と「疋」が使われている。

67 両リョウ(輛)

〈牛車〉出車一両(元亨三・一〇・二二)

68 艘サナブネ

〈船〉乗船……一艘男等一艘(元応二・四・一七)

69 鋪ホ

〈仏像〉愛染王像一鋪(元亨元・三・四)

70 幅フ

〈掛けもの〉後鳥羽院宸筆名号三尊一幅(元亨二・閏五・二二)



本尊普賢菩薩絵像一幅（元応二・五・二七）

71 尊シ

〔仏〕後鳥羽院宸筆名号三尊一幅（元亨二・閏五・二二）

72 座サ

〔論義・講論〕論義四座了（元応二・四・二九）

〔連句〕連句二座五十（正和二・五・一七）

〔詩歌合〕詩歌合……二座了着寝（正和二・九・三〇）

〔参考〕延——仏聖、神、釋奠。記——講（仁王講十座）。寺——なし。平——講（百座の薬師講）

〔宸記〕の連句、詩歌合せの用例は以前にないものである。

73 腰こし

〔刀剣〕御劔二腰（正慶元・六・六裏書）

〔参考〕延——白、袴、裙、裳、輦籠、輿。記——帶、袴、裳、劔。寺——なし。平——なし（刀剣は「振」という）。

74 柄イ

〔刀剣〕御劔一柄（正中二・三・九）

〔参考〕延——刀、匏、匕、斧、杓、鎌、円翳など。記——玉帶、梓、劔。寺——刀、匙、杓、銚など。平——なし。

75 管カン

〔笛〕笙五管（元弘元・一〇・一九）

〔参考〕延——緋幡、筆、高欄、鳥居、丸桁など。記——笛、筆。寺——笛衣、胡笙。平——なし。

76 張 チヤウ・はり

〔琴〕(箏) 二張 (元亨三・一一・二二)

〔参考〕延——単、幕、弓、氈、牀、皮、篩、簾、紙、鋸、鎌。記——琴、弓。寺——画像、茵、帳、弓。平——弓。

77 面 シ

〔琵琶〕比琵琶二面 (正和三・一一・一一)

〔参考〕延——印、堂、庇、殿、琴、琵琶、台盤、箏、鏡、鉦、鼓。記——帷、琵琶、鏡、鼓など。寺——鏡、鼓、鉦、磬、箏、琵琶、伎楽面、床、机、印。平——琵琶。

78 篇 シ

〔書物〕堯典一篇 (元亨二・二・二九)

79 卷 クワン

〔書物〕寛平御記十卷一見了、但第二卷欠 (正平二・一〇・四)

80 部 フ

〔書物〕玉葉集一部 (正和二・九・六)

81 段 ダン

〔文章〕(貞観政要) 表与君道初一段談了 (文保三・三・二五)

82 章 シヤウ

〔文章〕今日談尚第五般庚上初一両章也 (元亨二・九・一〇)

83 首 シュ

- 89 紙 二紙書之 (元亨二・二・二三)  
 帙<sup>チ</sup>
- 88 紙  
 願書一通 (文保元・四・七)
- 87 文字 古集中書出一句、不書韻一字 (正中二・二・七)  
 通<sup>ツ</sup>
- 86 字  
 「宸記」では、漢詩を「首」「韻」「句」と数えていて、ゆれがある。
- 85 句  
漢詩 毎日作詩四韻 (元応元・六・一〇)  
連句 連句五十韻 (元応元・五・二七)  
漢詩 古詩一句 (正中二・二・二四)  
連歌 連歌二十句 (正和三・六・一六)  
舞楽 万歳楽三句也 (元亨三・二・一九)
- 84 韻  
和歌 歌二十首 (元応元・五・二七)  
漢詩 詩十首 (元応元・七・四)  
 韻<sup>ナ</sup> (|| 句)

90 曲キョク

〈楽曲〉一曲了退（正和元・一一・二八）

朗詠兩三曲（元応元・七・七）

91 節セツ

〈区切り〉振梓三節也（元亨三・一〇・一〇）

厭舞三節（元亨三・一〇・七）

92 切キ

切（＝節）

〈区切り〉女官振鈴三切（正和二・一二・二四）

万歳樂三切（応長元・四・三二）

93 切キ

〈切れたもの〉予以右手取箸、夾鯛一切置箸台（延慶四・一・三）

94 声セイ

〈音〉雷鳴一兩声（元亨二・三・五）

振鈴三声（正和三・三・二七）

95 音オン

〈声〉召内豎音和羅和之三字不慥聞之様也（文保二・一・七）

内豎（ちいさわらわ）を「二音」即ち「二声」で召す。召しことばは「わらは、めせ」である。この「和羅和」を、はっきりとは聞えないように言うのである。なお、『江次第』には「召内豎音高長」とある。また、後醍醐天皇の「建武年中行事」には、「ちいさわらはをめす二声」とある。

96 息いき・ソク (|| 氣)

97 〈呼吸〉三息之後可召云々 (正和二・一・七)  
氣キ (|| 息)

98 〈呼吸〉二拝之間、可置三氣之程也 (正和二・一二・二七)  
拝ハイ

99 〈敬礼〉三拝了予入内 (正和二・三・一)  
揖イ

100 〈敬礼〉一揖着座 (正和二・八・一六)  
鉢ハチ

101 〈石〉石一鉢 (元応元・七・二九)  
筋スヂ

〈細長いもの〉上懸子納御本 鑲長筋 短筋紙捻三筋 (元徳元・一二別記)  
結緒七筋 (応長二・二・一八)

102 〈参考〉延 — なし。記 — 緒、帶、菖蒲草。寺 — 綱、石帶。平 — 矢、髮の毛。  
粒リ

〈仏舍利〉舍利千四百余粒 (元弘二・二・二〇)  
〔参考〕延 — なし。記 — 舍利、藥。寺 — 仏舍利。平 — なし。

103 〈灸〉今日灸左右肩各七十壮了 (元享四・四・七)  
壮ササ

「壮」は、灸のもぐさの数をいう語。草。「宸記」以前には見えないものである。

104 所<sup>シヨ</sup>

〈場所〉加灸二ヶ所（元亨元・八・二三）

修理地等一所（文保元・四・九）

105 連<sup>シ</sup>

〈念珠〉水精念珠一連（正中二・閏一・二五）

〔参考〕延——なし。記——念珠、数珠、水精、琥珀など。寺——漬墨、念珠。平——なし。

106 方<sup>ハ</sup>

〈方向〉東南二方卷簾（正慶元・一一・一二別記）

107 列<sup>リ</sup>

〈つらなり〉公卿一列、四位五位一列（文保三・一・一）

108 行<sup>ギヤウ</sup>

〈ならび〉小文二行敷之（元弘二・四・三二）

居飼六人<sup>二行人夜之時各取</sup>松明（元弘二・一・一五）

109 条<sup>ヂョウ</sup>

〈条項〉寺訴三ヶ条事（文保三・一・二二）

110 箸<sup>ハシ</sup>

〈食事〉一箸聞食云々（文保元・四・一九）

②集合体を単位とする場合

111 具<sup>グ</sup>

〔衣服〕加冠装束一具、理髮装束一具（元徳元・一二別記）

女房衣一具（元応二・九・二〇）

〔筥〕冠筥可有<sup>一</sup>具也（文保元・四・二六）

〔参考〕延——船代、薬刀、酒杯、仏器、服、櫛、箸、鞍、脚纏など。記——法服、袴、装束、鞍、筥、香具、酒器など。寺——幡、帳、器具、装束、楽器、戸など。平——装束。

112 重<sup>かさね</sup>〔被物〕（布施）導師被物<sup>五重</sup>裏物二、讃衆<sup>二重</sup>一裏也（元亨二・六・一一）

〔参考〕延——弓絃葉。記——細長、衣、褂、被物など。寺——石畳、御帳。平——小袖、装束。

113 領<sup>リヤウ</sup>

〔衣服〕合衣一領（正慶元・五・四）

女房薄衣二領（元徳元・一一別記）

単重一領（元亨二・六・一一）

〔参考〕延——服、半臂、毯、蓑、衣、袴、袍など。記——細長、衣、褂など。寺——衣、服、畳、襖、装束など。

平——鎧、絹。

114 雙<sup>サウ</sup>・双<sup>サウ</sup>

〔対のもの〕木箸一雙（元徳元・一一別記）

香爐花立一雙（元応元・七・一〇）

鶴一雙……鴛鴦一双（文保元・五・一七）

115  
足ツ

手競馬一雙（正和二・一〇・一七）

116  
履物ツイ 御靴 執柄一足（元徳元・一二別記）

（二つ一組）唐絵両三対（元応元・七・二九）

唐絵虎一対（正和二・一一・一二）

なお、『花園天皇宸記』では、数量の表現全てに助数詞がつけられているわけではない。数字を示しただけの場合もある。次に掲げるのはその例である。

瓶子一（元応二・四・一九）

銚子提各一（元応二・四・一九）

茶垵坏一（元応二・四・一九）

筥二（応長二・二・一八）

壺有二（応長二・二・一八）

衣冠一（正和三・三・二六）

冠一（正和二・二・二五）

小袖一（元弘元・一〇・一）

帷一（元弘元・一〇・一）

御装束一（元亨二・八・二九）



竹ノ針ヲ十許指入腹云々(正和二・五・五)

予句六(正和二・五・二七)

点五(正和二・五・二七)

俊範朝臣十三、点八(正和二・五・二七)

蛇一出来云々(正和三・閏三・一九)

鉄二、銅一、牙一、梨木二也(元応二・四・一九)

以杵三投入門入(正和三・閏三・四)

居膳一兩献(元亨元・五・一八)

五位職事一兩候(応長元・一二・六)

侍臣兩三候(正和三・三・八)

自余雜仕一兩(文保元・三・一〇)

蓋二鑑有二(応長二・二・一八)

被召物一(元徳元・二二・二五別記)

(蹴鞠) 数三百上了(元亨元・六・二二)

## 三

『花園天皇宸記』の助数詞は、鎌倉時代末の宮廷における天皇の言語生活の一端を示すものである。日記はもちろん天皇の意志による題材の選択の結果であるので、貴族の日記と異り、金銭的なもの、米、綿などの物質的なもの

のの記事が殆どない。貴族たちと異り、天皇は、そうしたことに直接関わるものがなかったから当然である。

平安時代の貴族たちの日記に見られて、『花園天皇宸記』に見えない助数詞にはどのようなものがあるか、また、室町時代の貴族である三条西実隆の日記『実隆公記』に見られて『花園天皇宸記』に見えない助数詞にはどのようなものがあるかを最後に掲げて、『花園天皇宸記』の助数詞の時代性の一面を示すことにしたい。

平安時代の「古記録」——貞信公記、九曆、御堂関白記、後二条師通記、水左記——にあって、『花園天皇宸記』に見えない助数詞には、次のようなものがある。( )内は使用対象である。

烟(家屋)、荷(荷物)、牙(犬)、斤(綿)、顆(真珠)、貫(銭)、丸(薬、球)、絢(糸)、戸(封戸)、石・斛(米)、筭(Ⅱ算、年令)、枝(花)、杓(水)、株(菊)、書(文書)、升(酒)、臍(麝香)、隻(矢)、饌(衝重)、束(稻)、袋(ふくろ)、端(布)、段(布)、挺(墨)、屯(綿)、筥(いれもの)、櫃(いれもの)、封(文書)、幅(絹)、捧(献物)、翼(雉)、里(距離)、両(金、銀)、輪(日輪)、聯(鷹)、屋(家屋)

また、室町時代の三条西実隆(一四五五—一五三七)の日記『実隆公記』(一四七四—一五三三)の助数詞(山内洋一郎「中世における助数詞について——その一『実隆公記』における数量表現——」広島文教女子大学研究紀要V 一九七二)と比較してみると、『実隆公記』で使われているが、『花園天皇宸記』には見えないものには、次のようなものがある。

荷(酒樽、木、竹、草、土など)、蓋(果実、野菜などを盛る)櫛(酒)、号(一号船)、函、綺(糸)、簀(貝)、器(茶、海藻、魚、鳥、塩、食品など)局(将棋)、顆(果実)、結(糸、綿、書冊)、緒・拈(紙・糸)、夾(鶏)、懸(鯛)、戸(食邑)、喉(魚)、縊(糸)、載(年令)、箱・冊(書物)、枝(草木、魚、鳥、巻数)、唱(小歌)、株(樹木)、炷(沈香)、振(太刀)、隻(鮭、鯉)、束(紙、木、竹、板、野菜など)、朶(花)、駄(米)、袋(茶、香、食品など)、桶(酒、魚、食品)、端(布帛)、紐(木)、軸(経)、丁(墨、材木、乗物、書物)、筒(油、水銀、花など)、貝(薬、薫物)、包(薬、香)、筆(書状)、緡(銭差しなどの縄)、服(薬、茶)、瓶(酒)、俵(米、麦、炭)、盆(果実、野菜)、籠(果実、野菜、水産物、

食品)。

〔付記〕 本稿は、一九九三年十二月四日、同志社大学における第四五回、国語語彙史研究会において口頭発表した「花園天皇宸記の助数詞」を修正したものである。当日参加者の方々に種々助言をいただいた。特に山内洋一郎氏には、未見資料の御恵与にあずかった。記して心より謝意を表する。